

日本語 Can-do-statements を利用した言語行動記述の試み ——日本語能力試験受験者を対象として——

島田 めぐみ*, 三枝 令子**, 野口 裕之***

キーワード: Can-do-statements, 日本語能力試験, プレイメントテスト, 言語行動, 自己
評価

要 旨

本研究は、具体的な言語使用場面における日本語能力を自己評価方式で測定する Can-do-statements 調査を用いて、日本語能力試験受験者が具体的にどのようなことができるかを明らかにすることを目的として実施した。まず、Can-do-statements 調査が日本語能力に関する尺度として有効に機能することを確認するため、Can-do-statements 調査の結果と日本語能力試験及び日本語プレイメントテストの各結果との関連性について検討した。その結果、日本語能力試験の結果を反映する尺度としての有効性が確認された。次に、Can-do-statements 各項目を分析した結果、日本語試験との関連が弱く、試験の結果から自己評価結果を予測することが困難な項目が4項目認められた。それらの項目は、1) 日本語以外の能力・知識に依存する程度の大きい項目、2) 回答者によって言語行動場面の判断が異なる可能性のある項目、3) 経験の有無が日本語能力の判定に影響を与えている項目に分類することができる。最後に、その4項目を除外した56項目の言語行動について、日本語能力試験の成績別受験者群がそれぞれどの程度達成できるかを示し、1級及び2級合格者の日本語能力の典型的なパターンについて考察した。

1. はじめに

Can-do-statements (以下, Cds) 調査とは、学習者に具体的な言語行動場面を記述した短い文章を提示して、それに対して「できる」「できない」を自己評価により回答させる質問紙調査である。言語テストにおいては、ある得点が結果として得られるが、そこで問題になるのは、その得点が何を意味しているかという点である。ある受験者が現実場面でどれだけの能力があるかを示さなければ、得点は数字の高低を指すにとどまる。近年、テストには得点の解釈基準が必要であるという認識が定着しつつあり、その作成に Cds が利用されることが多い。本稿では、日本

* SHIMADA Megumi: 東京学芸大学留学生センター助教授。

** SAEGUSA Reiko: 一橋大学教授。

*** NOGUCHI Hiroyuki: 名古屋大学教授。

語能力試験の解釈基準の記述を試みる。

2. 先行研究

大規模な Cds 調査として TOEIC に関するものと ALTE¹ が行ったものがあげられる。TOEIC に関しては、1999 年に「TOEIC Can-Do Guide」が公開された (TOEIC Service International and The Chauncey Group International 1999)。これは、TOEIC の得点を、その得点をとった受験者が英語を用いて遂行できる項目課題に対応づけることによって、具体的かつ詳細な情報として TOEIC 利用者である企業に提供することを目的として開発された。開発にあたって、企業活動上重要だと思われる英語運用力を特定した上で、「できる」または「できない」で回答する 75 項目から構成される Cds 調査票を用いている。

また、ALTE では、欧州における複数の外国語能力試験の能力水準の比較を容易にする手段として、Cds を開発した (Council of Europe 2001)。Cds は、400 ほどの項目から構成されており、3 つのエリア、社会と観光、仕事、学習に分類できる。約 10000 名の Cds の回答と当該受験者の言語テストの結果とが得られ、その結果 Cds を媒介として、異なる外国語能力試験による認定水準などの測定結果が対比できるようになり、試験認定証を参考にする企業などの雇用者にとって、認定証の解釈が容易になった。

日本語に関しては、日本語能力試験 (以下、JLPT) の妥当性検討の一環として、1997 年に JLPT 受験者を対象とした Cds 調査が始められた (日本語教育学会試験分析委員会 1999)。JLPT 受験者を対象に数回の Cds 調査が行われ、信頼性の高い Cds が開発できた (Cds の詳細は 3. で述べる) が、JLPT が能力水準の異なる 4 つの級を設定して測定しているため、受験者の能力の範囲が制限され、Cds の結果と JLPT 得点との間の相関が低い水準にとどまった (三枝 2004)。これに対して、大学のプレイスメントテスト受験者を対象に実施したところ、Cds とプレイスメントテストとの間の相関は、R 大学の場合は 0.760、T 大学の場合は 0.794 と高い値を示した (三枝 2004)。しかしながら、TOEIC や ALTE の研究のように、JLPT 各級の得点とその得点を得た受験者が具体的にどのようなことができるかという関連付けまでは行われていない。

3. 日本語 Can-do-statements

三枝 (2004) で開発された日本語 Cds は、調査対象者を日本の大学で学んでいる学習者、及びその前段階の者に設定し、調査項目の目標使用言語の領域を「大学生の生活」としている。ただし学術分野のみに絞るのではなく、大学外での生活に関する技能も含めている。作成にあつ

¹ The Association of Language Testers in Europe (欧州言語テスト協会) の略。

では、先行研究における行動記述の構成概念を参考とするとともに、外国人の日本語使用行動に関する先行研究²、大学や日本語学校で使用している教科書の内容などから、173 項目の行動記述が抽出された。その中から、1) 大学生が日常生活あるいは大学での勉学に必要なとされる行動、2) 回答者が実際に経験していると想定できる行動、3) 具体的で現実的な場面における行動、これらの条件に合うものを選定し、最終的に 60 項目(読む、書く、聞く、話す各 15 項目)が選ばれた。各項目に対する回答は、「1. 全然できない」から「7. 問題なくできる」までの 7 段階評定尺度の該当する箇所にチェックすることによって得る。

4. 目 的

JLPT などのテストの得点からは受験者が遂行できる言語行動を特定することはできず、具体的な受験者像を描くことはできない。しかし、Cds を利用することにより、テスト得点と言語行動を結びつけることが可能となる。三枝(2004)では、JLPT 受験者を対象に調査を行い、Cds 項目の整備が行われたが、JLPT 受験者が具体的にどのようなことができるかということを示すには至っていない。そこで、本研究では、三枝(2004)の Cds を通して、JLPT 受験者の典型的な日本語能力を明らかにすることを目的とする。そのために、まず Cds が自己評定尺度として有効に機能するか、各項目の有効性は問題ないかということを検討し、その上で JLPT 受験者が具体的にどのような言語行動がとれるかを検証する。ただし、本研究で検討する Cds は日本における大学生生活場면을想定して作成されているため、JLPT 1 級及び 2 級受験者のみを対象として分析を行う。

5. 方 法

5-1. 手 順

最初に、Cds の測定尺度としての特徴、及び、実際の JLPT との関連性について検討する(図 1 の ①)。これには、実際の JLPT の受験者に対して Cds 調査を実施した結果得られたデータ(データ・セット I)を用いる。ただし、JLPT は能力水準に対応する級別の試験であり、現段階では得点表示が、異なる級の得点を直接相互に比較できる共通尺度に等化³されておらず、級

² 丸山(1997)、日本語教育振興協会(2001)のほか、AJALT のホームページに掲載されている「リソース型生活日本語」(<http://www.ajalt.org/resource/>)などを参考とした。

³ 等化とは、難しさが異なる複数のテストの得点を相互に比較することが可能な共通尺度を構成する手続きのことを言う。

を通して Cds と日本語能力試験との関係を検討することができない。

そこで次に、日本語プレースメントテスト（以下、PT）（T 大学）の受験者に対して Cds 調査を実施したデータ（データ・セット II）を用いる。T 大学の日本語 PT は、JLPT で過去に出題された問題項目から全ての級にわたるように項目を選んで構成されている。JLPT が測定対象とする能力範囲全体での、Cds の測定尺度としての有効性、および、Cds 各項目の有効性について検討する（図 1 の ②）。

最後に再びデータ・セット I を用いて、JLPT 受験者各層（1 級合格者、1 級不合格者、2 級合格者、2 級不合格者）がどのような言語行動を遂行できるか検討する（図 1 の ③）。

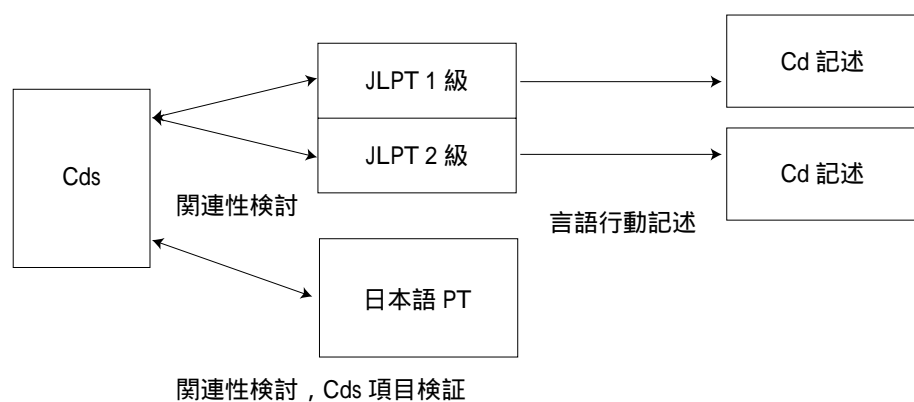


図 1 研究の手順

5-2. データの特徴

(1) データ・セット I

2002 年 12 月の JLPT 実施後 2 週間の期間内に、日本語教育機関 11 校にて Cds 調査を実施した。Cds 調査の回答者は 794 人であり、そのうち JLPT 1 級もしくは 2 級を受験しており、得点情報を得ることができた者は 754 人であった。級別の内訳は、1 級 583 人、2 級 171 人である。調査用紙は日本語、中国語（簡体字）、中国語（繁体字）、韓国語、英語の 5 言語を準備した。なお、日本語から各言語への翻訳は、まず各言語の母語話者が行い、それを異なる母語話者が再度確認した。

(2) データ・セット II

2003 年 4 月、日本語 PT 受験者にテスト終了直後 Cds 調査への回答を依頼した。PT の受験者 198 名のうち Cds 調査に回答した学生は 91 名であった⁴。回答者の母語は、中国語 40 名、

⁴ T 大学の PT は、2 会場で実施され、そのうち 1 会場では時間の都合で、ほとんどの受験者が調査に協力することができなかった。そのため、PT 受験者数に対し調査協力者数が少なくなっている。なお、受験者はランダムに 2 会場に分けられている。

韓国語 20 名，その他 13 言語 31 名であった．この PT は，受験者の能力が初級から上級まで幅広いため，様々な難易度の項目（98 項目）からなる．このうち 68 項目は JLPT4 級から 1 級で過去に出題された問題項目を用いている．また，「文字」に関する 20 項目は実際に書かせる問題を出題するために独自項目となっている．ただし，文字そのものの難易度は日本語能力試験の出題基準を参照している．これら合わせて 88 項目を JLPT 相当問題として取り扱う．Cds 調査用紙はデータ・セット I と同じものである．

6. 結 果

6-1. 日本語能力試験との関係

データ・セット I をもとに計算された Cds 調査の基本統計量および信頼性係数の推定値（ α 係数）は表 1 のとおりである．Cds 調査の得点範囲は，各技能が 15～105 点，4 技能の合計が 60～420 点である．Cds 調査の結果と JLPT の得点との相関は表 2 に示すとおりである．表 1 によると，いずれの技能も 70 点前後の平均値，15 点前後の標準偏差を示し， α 係数も 0.9 を超える高い値を示している．全体でも平均が 290.29 点，標準偏差が 53.29 点， α 係数が 0.981 であり，信頼性が高く，回答者間の違いをよく識別していると言える．しかしながら，表 2 によると，Cds 総合得点と級別 JLPT 結果の総点の間の相関係数は 1 級で 0.203，2 級で 0.312 と低い水準にとどまっている．

表 1 Cds 技能別の基本統計量・信頼性（データ・セット I） $n = 754$

	読む	書く	話す	聞く	合計
項目数	15	15	15	15	60
平均	74.27	68.86	73.39	73.77	290.29
標準偏差	14.50	14.62	15.21	14.55	53.29
α 係数	0.953	0.931	0.956	0.951	0.981

6-2. 日本語教育機関における日本語プレースメントテストとの関係

データ・セット II の PT のうち JLPT 相当問題の結果について，Cds 調査回答者の平均値，標準偏差，信頼性係数の推定値等をまとめたものが表 3 である．なお，各パートの得点はそれぞれ，素点を 100 点満点に換算している．Cds 調査の基本統計量等は表 4 に示す．表 3，表 4 から，PT も Cds も信頼性が高いことがわかる．JLPT 1 級，2 級受験者を対象とした Cds では標準偏差が約 53 であったが，PT 受験者を対象とした Cds では約 85 という数値を示しており

表2 日本語能力試験と Cds の相関

		Cds 読	Cds 書	Cds 話	Cds 聞	Cds 総計
JLPT	文字・語彙	0.304	0.157	0.051	0.105	0.166
1 級	聴解	0.215	0.186	0.166	0.222	0.216
	読解・文法	0.246	0.150	0.086	0.143	0.169
N = 583	総点	0.288	0.181	0.108	0.172	0.203
JLPT	文字・語彙	0.413	0.220	0.073	0.237	0.276
2 級	聴解	0.283	0.214	0.217	0.346	0.312
	読解・文法	0.297	0.182	0.113	0.264	0.251
N = 171	総点	0.370	0.228	0.146	0.318	0.312

(表4), PT のほうが受験者の能力幅が大きいことがわかる。また, 能力幅の大きさを反映して, PT 受験者の平均値は 256 点と, JLPT 1 級, 2 級受験者と比べて, 低めとなっている。

表3 2003 年プレイズメントテスト日本語能力試験相当問題基本統計量 n = 91

	聴解	語彙	文法	読み	文字	計
項目数	23	15	20	10	20	88
平均値	65.36	70.70	65.44	61.65	59.89	323.03
標準偏差	24.50	21.52	26.03	25.66	26.44	112.05
α 係数	0.896	0.811	0.900	0.764	0.873	0.963

表4 Cds 技能別の基本統計量・信頼性(データ・セット II) n = 91

	読む	書く	話す	聞く	合計
項目数	15	15	15	15	60
平均値	65.87	61.49	63.77	65.15	256.30
標準偏差	24.48	22.06	21.81	20.78	84.99
a 係数	0.987	0.969	0.981	0.979	0.993

次に, Cds 調査の結果と PT の結果との相関係数を表5に示す。Cds 調査総点と JLPT 総点1 級, 2 級それぞれとの相関係数が低めであったのに対し, PT 総点との相関は 0.804 と高い値を示し, 各類についても高い値が示されている。PT は JLPT 4 級から 1 級で過去に出題された問題項目を利用しているものであることから, Cds が JLPT と相関が低いのは, 級別試験であること, つまり「輪切り現象」に起因していたと言える。したがって, Cds は, JLPT とも高い相関関係にあり, 日本語能力を反映する尺度としての有効性が示されたと言える。

表 5 プレイメントテストと Cds の相関

	Cds 読	Cds 書	Cds 話	Cds 聞	Cds 計
PT 聴解	0.758	0.669	0.623	0.725	0.729
PT 語彙	0.711	0.645	0.648	0.729	0.717
PT 文法	0.709	0.609	0.583	0.645	0.669
PT 読み	0.755	0.672	0.588	0.667	0.706
PT 文字	0.823	0.775	0.705	0.759	0.805
PT 総合	0.834	0.748	0.697	0.780	0.804

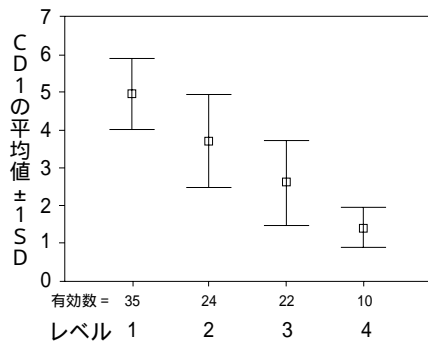
6-3. Can-do-statements 各項目の有効性

Cds 各項目の有効性，すなわち日本語テストの得点により各 Cds 項目の平均値がどのように変化するかを検討する．受験者の日本語能力の散らばりの大きいデータ・セット II の調査結果をもとに検討する．

PT 得点に基づいて受験者を 4 つの得点段階(レベル 1~4: レベル 1 が最も高く，レベル 4 が最も低い)に分け，各 Cds 項目の平均値と標準偏差が PT の得点段階によりどのように変化するか，すなわち，各 Cds 項目が日本語能力差をどの程度反映できるか，全項目について検討した．なお，この 4 つの得点段階は，T 大学の 4 レベル(初級，中級，中上級，上級)に相当する．得点段階各レベルの基本統計量等は表 6 のとおりである．図 1 は項目 1(新聞の社説を読んでわかりますか)における変化の様子を示したものであるが，能力が高いほど平均値が高くなっていることがわかる．このように得点の高いグループほど平均値が高ければ，その項目はテスト結果をよく反映していると言えるが，図 2 のようにレベル 1 と 2 が逆転している項目もある．このように能力群の平均値が一部でも逆転している項目は，全部で 4 項目存在していたが，これらは JLPT の結果から予測するのが困難な課題と言える．これらの項目については，7. 考 察で分析する．

表 6 得点段階別基本統計量

レベル	1	2	3	4
人数	35	24	22	10
得点段階	76 以上	55 以上 76 未満	30 以上 55 未満	30 未満
平均値	86.30	67.90	46.85	24.89
標準偏差	5.27	6.41	7.30	2.96



は平均値， は ± 1 標準偏差を表す。

図2 項目1のレベル別平均値・標準偏差

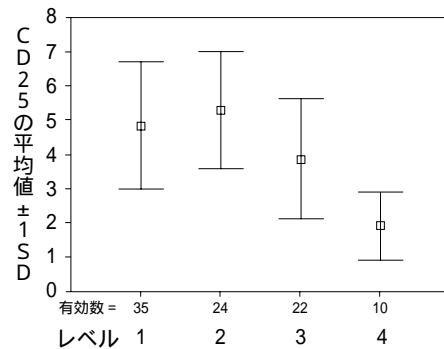


図3 項目25のレベル別平均値・標準偏差

6-4. 日本語能力試験受験者の言語行動

6-3. でテスト結果から予測できないと判定された4項目を除く56項目について、1, 2級それぞれの合格レベルではどの程度課題が達成できるかということを検討する。JLPT 級別受験者の分析になるため、データ・セット I をもとに検討する。JLPT 合格基準は1級が70%、2級が60%であるため、JLPT 受験者を次の4群に分類した。各群の人数、Cds 得点の平均値は表7のとおりである。表7を見ると、「1級不合格レベル」は「1級合格レベル」と「2級合格レベル」のちょうど中間に位置しているため、「1級合格レベル」と「2級合格レベル」の中間レベルとして設定した。同様に、「2級不合格レベル」は「2級合格レベル」と「3級合格レベル」の中間レベルと考える。

- 1) 1級合格レベル (JLPT 1級の総合得点が70%以上の者)
- 2) 1級不合格レベル (JLPT 1級の総合得点が70%未満の者)
- 3) 2級合格レベル (JLPT 2級の総合得点が60%以上の者)
- 4) 2級不合格レベル (JLPT 2級の総合得点が60%未満の者)

表7 各レベルの Cds 平均値

	人数	Cds 読 平均値	Cds 書 平均値	Cds 話 平均値	Cds 聞 平均値	Cds 総計 平均値
1級合格レベル	383	79.77	72.28	76.21	77.44	305.71
1級不合格レベル	200	72.94	68.17	73.68	73.34	288.13
2級合格レベル	114	66.64	64.05	67.93	68.74	267.36
2級不合格レベル	57	57.28	57.91	64.28	60.63	240.11

Cds 各項目に関し、各群の平均値を算出し、それを下記基準に照らし合わせ、各項目の言語行動がどの程度できるかをまとめたものが表8である。「できる」と「ある程度できる」、「ある程度

できる」と「できない」、それぞれの境界線をどこにするかという判断は難しいが、ここでは「1 全然できない」から「7 問題なくできる」の中間点 4 より 1 段階上の 5 以上を「できる」とし、逆に中間点より 1 段階下の 3 未満を「できない」と設定した。なお、表 8 の項目は、技能ごとに平均値の高いものから順に並べてある。

平均値 5 以上	「できる」
平均値 3 以上 5 未満	「ある程度できる」
平均値 3 未満	「できない」

表 8 日本語能力試験 1, 2 級受験者の Can-do 一覧

	平均値 5 以上「できる」	平均値 3 以上 5 未満「ある程度できる」	平均値 3 未満「できない」	
	1P = 1 級合格 1N = 1 級不合格 2P = 2 級合格 2N = 2 級不合格			
	1P	1N	2P	2N
読				
2 学内の掲示版のお知らせ・ポスター等の印刷物を読んでわかりますか。				
3 学校の規則を読んでわかりますか。				
8 電車やバスなどの車内の広告がわかりますか。				
12 ガス・水道・電気の明細書をみて必要なことがわかりますか。				
14 学校・区役所(市役所)などからの通知(お知らせ)がわかりますか。				
15 就職情報(求人広告・アルバイト情報誌など)を読んでわかりますか。				
6 駅や旅行会社においてあるちらしを読んでわかりますか。				
4 図書館の本棚にある本の背表紙を見て、必要な本を探することができますか。				
10 手書きの掲示板や黒板などに書かれたものが読んでわかりますか。				
11 新聞の社会面(事件・事故などの記事)を読んでわかりますか。				
9 病院で診察を受ける前の質問票を読んでわかりますか。				
7 勉強に必要な本や論文を読んでわかりますか。				
13 パソコンや機械の使い方の説明書(マニュアル)がわかりますか。				
5 小説を読んでわかりますか。				
1 新聞の社説を読んでわかりますか。				
書				
17 日本語能力試験の申込書が書けますか。				
19 封筒やはがきの住所が正しい書き方で書けますか。				
16 日本語で履歴書が書けますか。				
22 日本語で日記が書けますか。				
21 図書館や学校の事務の書類が書けますか。				
27 電話の伝言のメモを日本語で書くことができますか。				
24 授業・講義などで、日本語でメモがとれますか。				
26 お礼や挨拶の手紙が書けますか。				
20 会合やパーティーの案内状が書けますか。				
28 自分の考えや計画をまとめて、レポートにすることができますか。				
30 だれかに頼まれて、自分の国の事情などについて文章が書けますか。				

<p>23 公的機関(学校や役所)に資料を請求するための文が書けますか。 18 論文などの要約を書くことができますか。</p>	
<p>話</p> <p>35 日常の挨拶や、挨拶をした後の簡単な会話ができますか。 32 授業で先生に質問ができますか。 39 相手の言いたいことがわからない時、聞き返すことができますか。 41 自分の家族・仕事・勉強・国などについての質問に答えられますか。 36 デパートや商店で、自分の買いたい物について、希望や条件などを詳しく説明することができますか。 42 電車で忘れ物をした時、自分の持ち物などを詳しく駅員に説明できますか。 43 アルバイトの面接の時に、自分の能力などについての質問に適切に答えられますか。 34 自分の意見や考えを日本人の知り合いに十分に説明することができますか。 44 相手の気持ちを傷つけずに、断ることができますか。 31 医者に病気の症状を説明することができますか。 45 授業で日本人と話し合いができますか。 38 電話で申し込み、注文、問い合わせなどができますか。 37 自分の国の社会制度(教育制度、政治制度など)を説明することができますか。</p>	
<p>聞</p> <p>52 買い物の時、値段を言われてすぐわかりますか。 48 テレビの天気予報がわかりますか。 50 道をたずねて、その答えがわかりますか。 59 自分の頼んだことを、相手が引き受けてくれたか、本当は相手が断っているのかわかりますか。 55 電車・駅・デパートなどのアナウンス(放送)がわかりますか。 47 郵便局・銀行の窓口での説明がわかりますか。 54 学校職員の事務連絡を聞いてわかりますか。 46 テレビのドラマがわかりますか。 57 サービス業(デパート、ホテルなど)の人にていねいに話をされて、理解できますか。 51 授業・講演などを聞いて、全体の流れがわかりますか。 56 親しい人同士がくれた日本語で話しているのを聞いてわかりますか。 60 知らない人から電話がかかってきた時、その人の用件が、すぐにわかりますか。 58 ラジオを聞いて、どんなトピックについて話しているかわかりますか。 49 ゼミや公開討論の議論がわかりますか。 53 政治についてのラジオのニュースがわかりますか。</p>	

7. 考 察

以上、日本語 Cds の有効性、Cds 各項目の有効性を検討し、JLPT 受験者の Cds 記述を検討した。以下では、Cds 項目のうち、日本語能力試験の得点が反映されない項目を取りあげ、その原因を探り、次に、JLPT 受験者の典型的な能力を Cds 記述から検討する。

7-1. 日本語能力試験の得点が反映されない Cds 項目

6-3. で報告した JLPT 相当問題テストの結果から回答が予測できないと判定された 4 項目は、

次のように分類することが可能である。

1) 日本語以外の能力，知識に依存する程度の大きい項目

項目 25: ワープロ・コンピュータを利用して日本語で文を書くことができますか。

項目 25 は，日本語能力以外にコンピュータ利用能力が大きく関わっているため純粋に日本語能力のみを問う課題ではなかったと考えられる。

2) 回答者によって言語行動場面の判断が異なる可能性のある項目

項目 33: 授業で皆の前で発表できますか。

この項目は実際に専門の授業に出席しているグループと，そうではないグループとで，想定した場面が異なる可能性がある。すなわち，専門の授業に出席している高得点者が辛い評価を下したと考えられる。一方専門の授業に出席していないグループは，日本語の授業での発表を想定した可能性が高い。

3) 経験の有無が日本語能力の判定に影響を与えている項目

項目 29: サークルやイベントのちらしやパンフレットを作ることができますか。

項目 40: パーティや公式の席で挨拶やスピーチをすることができますか。

これらの項目は多くの学生にとって経験する機会が少なく，想像で回答したと思われる。

以上の3分類は，いずれも日本語以外の能力や経験に影響される項目だと言え，日本語テストに対応する言語行動としての Cds 項目からは排除すべきである。

7-2. 日本語能力試験受験者の典型的な能力

表 8 に JLPT 受験者の Cds 一覧を示したが，この表からわかる 1 級及び 2 級合格者の典型的な能力について考察する。

7-2-1. 「読む」について

回答者のレベルから，項目は，1) 回答者向けに書かれたテキストが読める段階 (2, 3)，2) 一般向けに書かれた身近な内容で，短いテキストが読める段階 (8, 6 他)，3) 一般向けに書かれた具体的な内容で，まとまった長さのテキストが読める段階 (10, 9 他)，4) 専門的，抽象的な内容で複雑なテキストが読める段階 (7, 1 他) に分けられる。そして，2 級合格レベルは 1) の段階，1 級合格レベルで 3) の段階と言える。1 級合格レベルは一般向けで具体的な内容であればまとまったテキストは読めるが，専門的，抽象的な内容で複雑なテキストが読める段階には至っていない。

7-2-2. 「書く」について

1) 書式が定まった単純で短い文章が書ける段階 (17, 19)，2) 自身について事実に基づいた，

短い文章が書ける段階（16, 22）, 3) 具体的で身近な内容が書ける段階（21, 27 他）, 4) 複雑な内容のまとまった文章を、読者を念頭において適切な文体で書ける段階（28, 23 他）に分けられる。2 級合格レベルで 1) の段階, 1 級合格レベルで 2) の段階と言える。

Cds 結果の平均値を見ても、「書く」がほかの技能に比べて低く（表 1）、回答者にとって書くことが難しいということがわかる。ほかの技能と比較すると、1 級合格レベルでも、「2) 自身について事実に基づいた、短い文章が書ける段階」にしか到達していないというのは、1 級に期待される能力を下回っていると言える。受験者にとって、現実場面で「書く」ことが求められていない、あるいは JLPT で「書く」ことがテストされないのを書く練習をしていない、などの理由が考えられる。Cds 調査により、ほかの技能に比べ、「書く」パフォーマンス力が低いという受験者像が明らかになった。受験者にあわせて、今後、困難度の低い Cds 項目を増やす必要があるだろう。

7-2-3. 「話す」について

1) 簡単なあいさつや質問ができる段階（35, 39 他）, 2) 自身に関する具体的な事象について説明できる段階（41, 42 他）, 3) 自身の考えを伝えられる段階（34）, 4) 日本人との対等なやりとりや抽象的な話ができ、待遇表現を使える段階（44, 45 他）に分けられる。2 級合格者で 1) の段階, 1 級合格者で 3) の段階にある。1 級合格レベルでも、4) の日本人との対等なやりとりや抽象的な話、待遇表現を使える段階とは言えない。

7-2-4. 「聞く」について

1) 値段や天気など内容が予想しやすい発話ができる段階（52, 48）, 2) 回答者に向けられた身近な内容の発話ができる段階（50, 59 他）, 3) 待遇表現や日本人同士の自然な会話がわかり、授業など長い発話も要点や流れが理解できる段階（57, 56 他）, 4) ラジオ、討論など抽象的で複雑な内容の発話や、予期しない内容の発話が理解できる段階（60, 53 他）に分けられる。2 級合格者で 1) の段階, 1 級合格者で 3) の段階にあると言える。

表 8 を見ると、「聞く」の項目は、回答者のレベルをよく識別している。他の技能同様、「聞く」についても、2 級合格者は 1) の身近な、単純な言語行動が行える段階と言える。1 級合格者は、「読む」、「話す」と同様、3) の段階にあり、抽象的で複雑な言語行動には到達していないことが明らかになった。

以上、JLPT 1 級および 2 級合格者の能力について考察を行った。各レベルに含まれる課題数は多いとは言えないが、全体を通して、「書く」の技能が他の技能に比べ到達度が低いこと、逆に、「聞く」「読む」の項目はそれぞれ、1 級合格レベルから 2 級不合格レベルまでの各段階に散らばっていることがわかった。そして、2 級合格レベルでは、留学生向きに書かれたテキストなら読め、

自分に向けられた発話は理解できるが、自分の言いたいことをまだ十分には伝えられない。1級合格レベルになると、「書く」を別にすれば、一般向けで具体的な内容であればまとまったテキストが読め、自身の考え方が伝えられ、日本人同士の自然な会話がわかり、長い発話であっても要点がつかめる。しかし、1級合格レベルであっても、抽象的で複雑な言語行動がとれるレベルには到達していないと言える。

8. 終わりに

自己評定方式を用いて、JLPT 1, 2級合格者が遂行できる具体的な言語行動の記述を試みた。客観性の高いテスト、すなわち多肢選択式のテストは、パフォーマンステストではないため、具体的な行動課題に関する能力を十分に測定することはできない。それに対し自己評定は、具体的な行動課題に関する能力を調べることができるという利点があるが、その信頼性について懸念されていた。しかし、信頼性係数も極めて高く、客観式の項目で構成される日本語テストの得点との相関が高いことも明らかになった。そのため、Cds 調査票を利用することにより、JLPT 1, 2級合格者(及び不合格者)の能力を具体的な行動課題で示すことができた。しかし、以下の問題点が残されているが、今回は扱うことができなかった。これらは、今後の課題としたい。

- 1) 本研究では1級と2級受験者が対象であったが、3, 4級に関しても同様の分析を実施することが望まれる。そのためには、現在の Cds 項目は、1, 2級受験者を想定して作成しているので、項目の見直しが必要である。
- 2) 受験者の能力像をさらに現実に近いものとするために、項目数を増やすことを検討する必要がある。特に「書く」に関しては、難易度の低い項目の作成が必要である。
- 3) 学習者における自己評価の厳しさの違いや、学習者の自己評価の一貫性について、さらに詳細な分析が必要である。

付 記

本稿は、平成13年度～15年度科学研究費(基盤研究 B1)「日本語 Can-do-statements 尺度の開発」(課題番号 13480068, 代表: 三枝令子)による研究成果の一部である。また、平成2003年度日本語教育学会秋季大会での研究発表(「日本語教育機関における Can-do-statements 調査の活用方法」)に新たな分析を加え、改稿したものである。

謝 辞

本調査を行うにあたって、多くの日本語教育機関の関係者の方々及び学習者の方々に多大なご協力をいただきました。感謝申し上げます。

参考文献

- 三枝令子 (2004) 『日本語 Can-do-statements 尺度の開発 研究成果報告書』(科学研究費補助金 基盤研究 (B1) 課題番号 13480068) .
- 島田めぐみ, 青木惣一, 浅見かおり, 伊東祐郎, 三枝令子, 孫 媛, 野口裕之 (2003) 「日本語教育機関における Can-do-statements 調査の活用方法」『2003 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 日本語教育学会, 119-124 .
- 日本語教育学会 (1999) 「第 5 章 妥当性検証の必要性」『平成 11 年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』, 国際交流基金, 日本国際教育協会, 167-173 .
- 日本語教育学会試験分析委員会 (1999) 『Can-do-statements 調査報告』, 国際交流基金 .
- 日本語教育振興協会 (2001) 『運用能力獲得のための基礎日本語能力』 .
- 丸山敬介 (1997) 「外国人の日本語評価における Criteria 試案」『同志社女子大学日本語日本文学 9』, 1-18 .
- 吉島 茂・大橋理枝ほか訳編 (2004) 『外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, 朝日出版社 (Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press) .
- TOEIC Service International and The Chauncey Group International (1988) *TOEIC Can-Do Guide*, Chauncey Group.